『太平広記』鬼部説話の構成 ―鬼二十一～二十五―

The ghost stories of "Taiping Guangji" vol.21 ～ vol.25

三田明弘
MITTA Akihiro

はじめに

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部説話四十巻のうち、「巻三三六　鬼二十一」から「巻三四〇　鬼二十五」までの鬼話の特徴を分析しつつ、盛唐期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼一～鬼十―」[1]及び「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十一～鬼十五―」[2]「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十六～鬼二十―」[3]の続編である。

右の三本の論文において、「巻三一六　鬼一」から「巻三三五　鬼二十」までの説話を分析し、鬼話の代表的な話型パターンを7種類に大別した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚　人と鬼が男女の交わりを持つ話。男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少ない。跡継ぎの子が産まれる場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚　一夜の宿を借りた家が、翌日見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼帰還譚　鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚　冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命令に従い冥途に赴くのが基本パターンであるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話も多い。

⑤鬼神遭遇譚　自宅や、その他の場所で鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるというパターンも少なくない。

⑥凶宅闘鬼譚　家に鬼が居着いて、家人を悩ませるという話型であり、

多くのバリエーションが見られる。その家の元の持ち主であったり、外から来たものであったり、鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるという要素が見られる話や、その家に住む人を助ける鬼の話もある。

⑦冥事占判譚　人の運命（冥事）を知ることが出来るということが鬼の大きな特徴の一つであるが、優れた道士などは、鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる。そのような人間が、人の運命に関する情報を知り、予言したり運命を操作したりする話。

本稿では「巻三三六　鬼二十一」から「巻三四十　鬼二十五」までの全所収話のタイトルと概略を掲げ[4]、それらを右に掲げた話型一覧に基づき、話型毎に分類した上で、説話内容の分析を行う。

一　戦乱未だ止まず
―巻三三六　鬼二十一―（唐粛宗・乾元～上元）

巻三三六　鬼二十一

常夷　建康の常夷は、梁代の人の鬼である朱均に交友を求められ、朱均を自宅に招き、梁・陳の世の史書に残っていない故事を聞いた。後に病いに罹ると、司命神より常夷が冥界の長史になることが要請されていると朱均に言われ、それを承知して服薬を止めて卒した。

張守一　乾元年間、公平な裁判で多くの冤罪の者を救った大理少卿の張守一は、張に息子を救われて恩義に感じた鬼の助けで、天使を装い、士人の娘を騙して七日間の逢瀬を楽しんだ。武則天の時代になって、張は公平な裁判を行っていたために酷吏に捕らわれ、嶺表に流罪となり、生活が窮迫した。鬼がくれた薬で、雑骨を刀の柄などに加工できる上質の骨に変え、その稼ぎでしのいでいたが、薬が無くなって卒した。

鄭望　乾元年間、鄭望は　旅の途中、亡父の旧友である王将軍宅で歓待を受け、そこで蘧蒢の三娘の巧みな歌を聞いた。数ヶ月後、再び王将軍宅に立ち寄った際には、三娘は夫に従って都に帰ったとのことで不在であった。翌日、辞去して門を出ると、王将軍宅は実は王将軍の塚であった。塚の先には楽人の店があり、楽人の急病で死んだ妻が塚の傍らに葬られていた。遺体を葦蓆で包んだので蘧蒢の三娘と呼ばれていたが、十日前に楽人が遺体を移して長安に埋葬していた。

宇文覿　乾元年間、前任者が次々と死んでいる呉山の県令に任命された韓徹を救うために、門下の進士である宇文覿と辛稷は、原因と見定めた大槐樹を伐ろうとして、大樹の中に人骨や髪や歯を発見し、韓徹は、その遺骨を埋葬し直してやった。遺骨は晋代の戦死した将軍契苾鍔のものであり、契苾鍔の鬼は韓徹と宇文覿・辛稷に感謝し、特に宇文覿は危難に多く遭うので、三度、その命を救う約束をした。ただ、宇文覿に官職を得る運はないので、突然官職を得てしまったときは助けられないとも言った。そして、約束通り、その後、契は何度も危難から救ってくれたが、宇文覿は河東節度使の書記への任官を受けてしまい、四日後に病死した。

李瑩　寿昌の令、趙郡の李瑩の父方の従姉妹の第十三は至徳の初めに兄たちと呉に移住し、後に死亡した。その兄である岷には、安史の乱で自由に往来出来なくなり、呉に行けなかった妹もおり、済源の荘園に一人で住んでいたが、上元年間、彼女の元に、これまで安禄山の賊軍に攫われていたと言って妹の第十三が現れ、姉は第十三を近くの張氏に嫁がせた。四、五年して生まれた子は賢かった。また、岷の家の田地は多くが

人に占拠されていたが、訴訟をして取り戻すことが出来た。永泰中、国が落ち着きを取り戻し、岷が江東から科挙受験のために上京し、帰りに済源の荘園に寄ると、第十三が死んだばかりとのことであった。岷は妹の第十三は上元年間に既に死んで呉の海鹽に葬っており、おそらくは鬼魅であろうと言い、張家に行くと、遺体は消えており、その衣類はかつて棺に入れた物であった。そして、子もすぐに死んでしまった。

裴晊　河東の裴晊は箏で名が知られていたが、南楚で客死した。母と妹の元に、急に裴晊が帰ってきて箏を弾き、また妹に箏を教えた後、見えなくなった。晊の遺体を運ぶ輿が着いたのは、そのすぐ後であった。

李氏　長安の来庭里の婦人李氏は、白昼、夫の亡妹の鬼に追われて家の外まで逃げ、北門の兵卒が馬鞭で鬼を打つと、鬼は被っていた幞頭布だけを残して消えた。幞頭布の下には髑髏があった。

「巻三三六　鬼二十一」は、安禄山は息子の安慶緒によって殺されたものの、いまだ安史の乱が収束しない乾元から上元の粛宗の時代を背景とする鬼話群であり、説話の内容にも時代特有の状況が反映している。

冥婚譚

「李瑩」は安史の乱による家族の分断が、すでに鬼となった妹をそうとは知らずに人間に嫁がせる原因となっている。時代が落ち着き、鬼である事が明白になると、第十三は人間の社会の中に息子共々居場所を失ってしまうのである。

塚墓宿泊譚

「鄭望」は塚墓宿泊譚としては典型的な作品であり、塚に棲む鬼が孤立した存在では無く、近隣の鬼とも交流があるという冥界観を、本話にも見ることが出来る。

変鬼帰還譚

変鬼帰還譚には、家族が、帰ってきた者が鬼であることを知っている場合と知らない場合があるが、「裴晊」は後者である。鬼によって生者に楽曲が伝授される話としては、「嵇康」（「巻三一七　鬼二」）の、嵇康が鬼から琴曲「広陵散」を伝授される話が有名である。

「李氏」は、なぜ妻が夫の亡妹に追われるのか明記されていないので、生前の人間関係によるものではなく、遺骨に悪鬼が取り憑いたと解釈したい。

鬼神遭遇譚

「常夷」は、常夷と鬼との交流譚が、羅列される梁・陳の逸話の枠物語になっており、全体が一つの小型の説話集のような構成になっている。

「張守一」は、冒頭に「乾元」とあるが、後半が則天武后の時代の話なので、この元号は誤りである。則天武后の酷吏政治を皮肉る説話であり、年代順に説話を配列するという『太平広記』の配列原則から言えば、より前の巻に収録されるべきであった。

凶宅鬧鬼譚

「宇文覿」は、前半の話型は、特定の場所に縛られている鬼が怪事の原因であるという、凶宅鬧鬼譚の典型的なものであるが、後半には、岐州の土賊が皇帝を僭称しようとして百官を署置し、宇文覿の名が中書舎人として勝手に入れられてしまったために、宇文覿も土賊の一味として州獄につながれてしまい、契苾鍔が奔走して名誉回復する一段があり、当時の世相を窺わせる。「張守一」「宇文覿」は何れも鬼の報恩譚であるが、鬼による救済には限界があるという点も共通している。

二　安史の乱の終焉
―巻三三七　鬼二十二―（唐粛宗・乾元～代宗・大暦）

巻三三七　鬼二十二

韋璜　潞城の県令周混の妻の韋璜は乾元中に卒したが、生前の義妹との約束により、死後に家族に対して霊語をなした。その内容は、閻魔王の側近くに仕えることになったこと、泰山府君の娘の嫁入りの準備を手伝うことになったので婢を借りたいという申し出等で、実際に紅染のために借り出された婢は仮死状態になり、蘇生した時に手が紅色に変わった。また、姉や夫に自作の詩を送ることもあった。

薛万石　薛万石は、広徳の初めに浙東観察の薛兼訓によって永嘉令に任命されたが、数ヶ月後、急死してしまった。殯が終わると万石は棺の中から録事らを呼び、彼の妻子のために米を提供することを要求し、また二人の娘のために婿を探して来たりもした。家族が故郷に帰るに当たっては、山賊の禍に遭わぬよう速やかに出発するよう勧め、その後も香を焚いて相談すれば、必ず現れて答えてくれた。

范俶　広徳の初めに蘇州で酒場を開いていた范俶は、日暮れに門前を過ぎった美女を誘い、一夜を共にした。翌日の夜明け、去り際に女は櫛を失ったと言い、探したが見つからず、范俶の臂を嚙んで去った。明るくなってから范俶は床前に紙の櫛を見つけ、女をうとましく思った。まもなく身体が痛み出し、赤く腫れて、六、七日して死亡した。

李澣　河中の少尹の李澣は、先妻の項氏が卒した後に竇滔の娘と再婚し、広徳二年に死んだが、初七日に家族の前に現れ、妻の竇氏に余命が二年ほどである事を告げ、すぐに冥途に来て共に楽しく暮らすよう勧めた。妻は答えなかったが、李澣は妻に仕えている四人の婢に妻の服で作った袋を与え、妻に随って来るよう命じ、先妻の項氏の生んだ子らには、地下では項氏とは会っていないことを告げ、自分を項氏ではなく竇氏と合葬するよう命じた。後日、迎えの車騎の訪れが四人の婢のみに見え、婢らは竇氏の支度をし、家人に別れを告げると倒れて死んだ。

張勍　代宗の時代、河朔は寇賊が跋扈し、未だ安定していなかった。恒陽の張勍は旅の途中で襲われ、自らも衆を従え旅人を殺害する賊となったが、恒陽の人は襲わないという誓いを立てていた。ある夜半、張勍が千人を率いて月明りの林で休んでいると、百人余りの花嫁行列と遭遇し、争いになったが、相手は恒陽の王の娘を妻として迎える幽地の王であった。戦っても傷つけることの出来ない鬼の軍に恐れをなした張勍は降伏し、幽地の王は張勍に、史思明に仕えることを勧め、兵法書を授けた。兵法を身につけた張勍は史思明の将となり、数年後に死んだ。

牛爽　永泰中、牛爽は盧州の別駕となり、任地に赴く途中、乳母が驢の鐙で擦り傷を作った。一年後に、乳母の傷口から数匹の蟬が飛び出して庭樹に集まる怪異が起き、竈神が祀ることを要求しているためであると巫女が言ったが、牛爽はこれを信じなかった。その後、一年余りは何事も無かったが、夏の夜、寝台に屍が伏している怪異が起き、これを宝剣で撃つと、閨房で寝ていた長女が腰を断たれて死んでいた。半年後にも同様のことが起き、今度は次女が死んだ。家中の者は恐れ、周囲の人からは鬼神と争わずに転居することを勧められたが牛爽は従わず、翌年には末娘を殺してしまった。親しい友人が強いて引っ越させたが、牛爽は病死し、屋敷は廃屋となった。後に、牛爽と親しかった華山の道士褚乗霞が、この屋敷を調査し、取り憑いていた卓女郎という二十歳程の鬼を調伏した。卓女郎は褚乗霞に、牛爽父娘の死は、徳を修めず誣告や詐欺をしたため命数が尽きることになっていたためで、自らの咎ではないと

語った。褚乗霞は堂の地下にあった卓女郎の塚を発掘し、別の場所に移させ、それより屋敷で怪事が起きることはなくなった。

李咸　永泰中、太原の王容は、従兄弟の李咸と鄧州の駅庁に宿泊し、夜中に李咸が駅吏の妻らしき美女と逢い引きをして、その後、手紙を書いたりしているのを見た。李咸と女が部屋に入ったので、驚かそうとして王容も入っていくと、女は顔の長さが三尺もあり、首を絞めて李咸を殺そうとしていた。枕を投げつけると、女は逃げて厨房に入り、顔は屋根の梁に届くほど長くなり、やがて消えた。李咸は夜が明けてから蘇生したが、美人に誘われた夢を見たと言うのみで、自分が家族への置き手紙を書いたことも覚えていなかった。駅の古吏の話では、昔から厠に神がいて、先天年間にもかつて宿泊した役人を殺したとのことであった。

李晝　永泰二年春、許州の吏の李晝は、清明節に、荘園のある扶溝に帰り、夜、路傍の塚の上で、五人の娘が燭台の元で針仕事をしているのを見た。李晝が叱すると皆消えたが、五つの松明の火に追われて李晝は馬で逃げ、犬がやってきて、ようやく火は滅した。馬の尾は焼き尽くされており、それよりこの塚を五女塚と呼ぶようになった。

元載　大暦九年春、中書侍郎平章事の元載は、出勤の途次、文章を献じようとする者と出会った。元載が中書省に着いてから読むと答えると、その場で自ら誦することを求め、住む人のなくなり荒廃した屋敷の詩を誦して消えた。元載は後に破滅し、妻子も殺された。

蕭審　工部尚書蕭旻の子の蕭審は、貪欲かつ暴戻で恐れられていた。永泰年間に長洲令となり、三年にわたり賄賂を貪ったが、永泰四年五月、紫衣の騎士三十騎余りが屋敷に入り、蕭審を捉えて連れ出し、突然消えるという怪事があり、屋内には蕭審の遺体があった。死後、蕭審は弟や婢に憑いて霊語を為し、商売の元手の米と絹を蕭審が出資した胡人が逃げようとしているのを捉えさせ、米は自分で買ったが、絹は法を曲げて手に入れたものなので喜捨するように命じ、弟はその通りにした。

「巻三三七　鬼二十二」は、粛宗から代宗へと代が替わり、安史の乱が漸く収束する時代の説話を収録している。特に「張勍」は、鬼話の視点から安史の乱を総括する説話となっており、注目される。

冥婚譚

「范俶」において、范俶が紙の櫛を見つけて女を嫌悪したのは、それが紙銭などと同様、死者の副葬品であり、女が鬼であると分かったからである。より殺意の明確な鬼を描く次巻の「王垂」と、本話には幾つかの共通点が見られるので、女は、男の色欲を刺激して誘い、取り殺す悪鬼の類と考えられる。

変鬼帰還譚

「韋璜」は仏教的冥界観に基づく閻羅王や鑊湯剣樹と、娘の嫁入り支度をする泰山府君という通俗的でユーモラスなイメージが混在している点が注目される。

「薛万石」は、県令が死後に部下たちに遺族への援助を要求するなど、家族のために鬼の力を使う説話であり、「李霸」（「巻三三一　鬼十六」）と同工異曲の作品である。

「李澣」「蕭審」は、死者が我欲で遺族らを使役する話である。蕭審が胡商を捕まえさせたのは、裏切られた怒りと、贓物を喜捨することによって自らへの死後の罰を軽減させる為であろう。「李令問」（「巻第三三〇　鬼十五」）にも、武装した鬼の集団が家に押し入って悪人を連れ去る、というモチーフが見られる。

鬼神遭遇譚

「張勍」は、安史の乱の時代に良民が叛賊化するモデルケースを提示するとともに、史思明軍の将軍となった張勍の死によって安史の乱の終焉を暗示する説話でもある。幽地の王は、愚かな張勍にあえて破滅の道を歩ませようとして兵書を与えたのであろうか。そうであるとすれば、幽地の王は、欲にまみれた人々を狂躁的に戦争に自ら飛び込ませるデモーニッシュなパワーの象徴に他ならない。また、人と鬼の軍隊同士での戦を描写している点も本話の特徴的な要素である。

「李晝」は祖霊を祀る清明節の出来事である点から、五女は祭祀を要求して出現した鬼と考えられる。

元載は大暦五年（770）に、時の権力者であった宦官の魚朝恩を、代宗と謀って誅殺し、自らが権力を握ったが、その専横を代宗に憎まれ、大暦十二年（777）に逮捕、処刑されている。「元載」は、この史実を前提とする説話である

凶宅鬧鬼譚

「牛爽」には、牛爽と娘たちの死は、鬼の積極的な意志ではなく、牛爽が徳を積まなかったため命数が尽きたとする、因果応報論的運命観が見られる。

「李咸」の鬼は、「婦人白面長三尺余」「据牀坐、頭及屋梁」などの顔の異様な長さを表す描写や、首を絞めて人を殺そうとする点などから、縊死した者の鬼であると考えられる。「范俶」の鬼と同じく、男を誘惑して死に至らしめる悪鬼である。

三　かりそめの平和
―巻三三八　鬼二十三―（唐代宗・大暦年間）

巻三三一　鬼二十三

盧仲海　大暦四年、處士の盧仲海が叔父の盧仲纘と吳に旅をした際、夜半、仲纘が急死し、盧仲海が何度も名を呼んで蘇生させた。仲纘は「死んでいた間、尹という郎中令の屋敷で宴席に連なっていたが、名を呼ばれているのが聞こえたので生き返ることが出来た」と語った。しかし、すぐに仲纘は尹のところに引き戻され、仲海が再び名を喚んで明け方に蘇り、「また酒を飲み、さらに職も授かりそうになっていたが、何度も頼んでようやく解放された」と述べた。「鬼神は疆を越えず」というので、二人は船で、その地を急ぎ離れた。

王垂　大暦の初め、太原の王垂と范陽の盧収は、舟旅の途中、夫に会いに行く女を同乗させてやった。夜になって王垂は女と深い仲になり、盧収は女の持ち込んだ袋の中が髑髏に満ちていたので、女が鬼であると知った。翌朝、女が下船した隙に二人は船を出して逃げたが、夜に女は船を見つけて入って来て王垂に噛みついた。女は顔の四面に目があった。二人は叫び、周りの船が助けてくれたので女は消えた。翌朝、紙の櫛が席にあった。王垂は数ヶ月して死んだ。

武丘寺　大暦の初め、蘇州の武丘寺で、夜に二人の白衣の者が楼に上ったまま降りてこないので、翌日、寺僧が探しに行くと、楼上に鬼が書いた三首の韻文があった。武丘寺の荘園には墓林があり、古い塚が累々としている。鬼の書いた文は今も残っている。

李公佐　大暦中、李公佐が廬州にいた時、書吏の王庾という者が、夜、郭外で紫衣の高官の行列を見た。行列の御者が車を牽く綱が切れたこと

を報告すると、紫衣の人は名簿を調べさせて、盧州某里の張道の妻の背中の筋を取って修理するよう命じた。張道の妻とは、王庾の叔母であった。しばらくして役人が二本の白い物を持ってきて車を修理し、行列は去って行った。王庾が叔母の家に行くと、叔母は変わった様子はなかったが、翌日になると背痛を患い、半日で死んだ。

竇裕　大暦中、進士の竇裕は成都に行く途中、洋州で急死した。友人であった淮陰令の沈生は、竇裕からの音信が途絶えた所以を知らぬまま、金堂令となり、赴任の途次、洋州の館舘で、竇裕に似た白衣の男が悲しそうに詩を吟じているのを見て、竇裕が鬼となったかと嘆じた。翌日、路で殯を行っているのを見て、尋ねると、まさに竇裕の殯であった。

商順　丹陽の商順は呉郡の張昶の娘を妻としていた。京兆少尹であった張昶は、卒して滻水の東に葬られていた。商順は雨と雪の降る夜に長安城外で道に迷い、死に瀕したが、張昶の霊が商順に光で行くべき道を示し、張昶の墓守の元に誘導した。墓守は、急ぎ商順を迎えに行くよう命じる張昶の声を聞いていた。

李載　大暦七年、転運使の劉晏が吏部尚書となり、大理評事の李載が監察御史を兼ねて福建の留後（軍政官）となった。李載は風土病を恐れつつ、半年後に死亡したが、残務整理のために一時的に蘇生し、業務を終え、遺書を作って家の事も処理した。李載は、妻の崔氏は先に死んでおり、妾を一人置いていたが、地下で妻に妾のことを話すと、妻が怒って家に来ると言うので、妾に財産を分けて、北に帰らせることにした。妾はすぐに船に乗ったが、妾を送るよう命じられた役人の都合で出発が遅れていたので、李載は役人に杖五の罰を与え、すぐに立ち去らせた。すべき事と食事を終えると、卒した。

高勵　崔士光の岳父の高勵は、夏のある日、荘園で麦打ちを見ていると、馬に乗って来た鬼に、馬の前足を治すよう頼まれた。馬は木馬で、膠を塗れば良いとの事だったので、言われたようにしてやると、馬はとても早く走れるようになった。鬼は高勵に謝して、去って行った。

蕭遇　信州刺史の蕭遇は年若くして両親を亡くし、母の墓がどこなのか、数十年分からないままであったが、改葬しようとして、間違って盧会昌の墓を開いてしまった。蕭遇は方士の道華に盧会昌の鬼を呼び出して貰い、盧会昌に母の墓所を探させるが、盧会昌は見つけることが出来なかった。しかし、蕭遇の至孝が天を動かし、蕭遇は夢中に母と再会することが出来、本当の墓の場所は上に李五娘の墓が作られ、しかも平坦になってしまっていて分かりにくいが、明日、烏鵲の集まるところを見よ、と母に教えられ、母の墓を見つけることが出来た。

朱自勧　呉県の朱自勧は宝応年間に卒し、娘は尼僧になっていたが、大暦三年、朱自勧の鬼が、娘に仕える婢の前に現れるようになり、娘のために餅や絹をくれた。その後、朱自勧の鬼は、数十人の客と共に寺に行くので、昼食を用意するようにと、婢を通して娘に命じ、娘が食事を用意すると、婢に取り憑いて食事をし、その後は現れなくなった。

「巻三三一　鬼二十三」は、代宗の大暦年間の鬼話を収録している。大暦は比較的安定していた時代で、説話内容もあまり歴史的大事には関わらない。

冥婚譚

「王垂」では、女の背負っていた袋の中に満ちた髑髏が、女が人を誘惑して殺す悪鬼である事を示している。前巻の「范俶」「李咸」の鬼の同類である。「范俶」と本話とは、紙の櫛が残されていたのが女が鬼である証拠となっている事や、男に噛みつく事などの共通点がある。

変鬼帰還譚

「竇裕」は、おぼろげな姿で彷徨う鬼の姿に幽玄の趣がある。鬼の吟じた詩を紹介することに本話の主眼は置かれている。

「商順」は、遭難しかけていたところを岳父の鬼が道を示して助けてくれたというもので、話型としては世間話等にも見られる普遍的なものである。

「李載」は亡妻と現世の妻を巡る説話であるという点で、前巻の「李澣」と共通する。本話は、冒頭に転運使の劉晏が吏部尚書となったことに触れている。劉晏は、安史の乱後の国家経済を立て直したことがよく知られており、大暦年間を代表する人物の一人である。

「蕭遇」は、鬼話であると共に、亡母との再会が天の感応の結果であるという点で孝子譚でもある。

「朱自勧」では、父の霊は婢の前には直接姿を現わすが、娘とは婢に憑依した状態でしか会っていない。これは、現実の肉親の降霊が依り代を通して行われたことを反映したものであろう。

冥界召喚譚

「盧仲海」は死者が召喚された先が、冥府ではなく、冥界の高官の邸宅である点に特色がある。

「李公佐」は、死期の来た者を名簿で調べて死をもたらすという点において、冥界召喚譚の構造を有しているので、冥界召喚譚に分類した。

鬼神遭遇譚

「武丘寺」は、鬼の記した韻文の紹介を主眼とする説話である。

「高勵」において、鬼の乗る馬が木馬であるのは、殯宮に置かれる副葬品の馬が木製であることに因る。

四　朱泚の乱
―巻三三九　鬼二十四―（唐代宗・大暦～徳宗・貞元）

巻三三九　鬼二十四

羅元則　歴陽の羅元則が、広陵に行く途次、自分の舟に便乗させてやったのは、死期の至った人を冥界に行かせる鬼であった。羅元則は、鬼の所持していた指令書を盗み見て、自分が対象となっている事を知り命乞いをし、鬼から、三年間、外に出なければ十年延命できると教えられた。羅元則は、かつて同じ県の人の田を奪ったことがあり、その人が死後に自分を訴えたために、冥界に召喚されたのであった。帰宅して一年余りが過ぎ、父から稲の収穫を命じられ、やむを得ず門外に出ると、件の鬼が傷だらけの姿で待っており、羅元則は両親に別れを告げて死んだ。

李元平　睦州刺史李伯成の子の李元平は、大暦五年、東陽の精舎に寄宿して受験勉強をしていたが、知り合った美女の鬼から、元平の前世が江州刺史の門番で、霍乱で死んだ身であることを教えられた。美女の鬼は当時の刺史の娘で、この門番と私通していたが、来世では、ともに貴家に生まれて結ばれるように、千手千眼菩薩の呪を持して願ったとのことであった。二人で一夜を過ごした後、女鬼は自分にも転生の時が訪れたと言い、十六年後に二人は結婚することが既に天命として定まっていることを告げて、去って行った。

劉参　建中二年、江淮で厲鬼が湖南から襲来したという噂が広がり、人々は恐懼した。前兗州功曹の劉参は、自宅に、毛に覆われた鬼と、鋭い毛の生えた寝台のような怪物が侵入して娘たちが襲われ、息子たちと共にこれらと戦った。鬼は数日にわたって街にいたが、後に、盗賊が妖異を装っていたが既に罪に服したとの布告があった。

閻敬立　興元元年、朱泚が長安を占拠した。段秀実に告密史に任じられた閻敬立は長安から密かに鳳翔山に出て、夜、荒廃した館駅で、館官である前鳳州河池県尉の劉俶のもてなしを受けた。翌朝、館駅を発つとすぐに次の館駅の吏に出迎えられたので驚き、昨日の館駅に共に戻ると、そこは廃棄された館駅と劉俶の荒廃した殯宮があるばかりであった。前夜の駅館の食事は、殯宮に供えられた物であった。

崔書生　貞元中、博陵の崔書生は、清明節に渭南に帰る途次、日暮れに荒れ塚のあたりで、道に迷った美女王氏を助けて、その館に招かれ、そのまま王氏の婿となった。王氏の叔母の玉姨とも何度も賭けをして勝ち負けに応じて互いの持ち物を交換する等、三日にわたり楽しく暮らしたが、突然、賊がやって来たと言って、皆いなくなってしまい、崔は一人で穴の中にいた。実は、行方不明になった崔を、童僕が墓穴を掘って探し当てたのであった。墓穴は、後周の趙王の娘の玉姨の墓で、生前可愛がっていた姪の王氏も合葬されていた。玉姨の棺には崔から賭けで取った口紅の小箱が入っていた。崔はすぐに墓穴を元通りに埋め直した。

李則　貞元の初め、河南の少尹、李則が卒した。弔問に訪れた蘇郎中と名乗る朱衣の人が哀慟すると、遺体が起き上がり、門を閉ざして二人で殴り合い、暮れになって子が内に入ると、二体の李則の屍が横たわっており、誰も見分けられず、同じ棺をもう一つ用意して葬る事となった。

陸憑　貞元元年に旅先の永嘉で病没した呉郡の陸憑は、親友の呉興の沈萇の夢に現れ、家の事を頼むと共に、詩を送り、去り際に翌日の午の刻に遺体を乗せた船が到着することを告げた。沈萇は目覚めた後も夢の内容をはっきりと覚えており、記録した。葬船の到着も陸憑の言ったとおりであった。

潯陽李生　貞元年間、科挙に落第した李生は潯陽に帰る途次、商洛で漢南節度使の入京に道を阻まれて、山中に入り込み、殯宮の中で一夜を明かすことになった。夜、近くの別の殯宮のあたりから女がやってきて、この殯宮に入り、金華夫人から崔女郎への月見の誘いを述べた。すると、殯宮の内からは、今夜は客があるので伺えないとの返事があり、女は帰っていった。翌日、李生は宿で、昨夜の殯宮が博陵の崔氏の娘のものと知り、酒と膳でその霊を祀って去った。

「巻三三九　鬼二十四」では、代宗から徳宗への交代期の説話を扱う。かりそめの安定期が過ぎ、藩鎮の反乱が国家を動揺させた時期であり、本巻には、朱泚の乱を背景とする説話が収録されている。

冥婚譚

「李元平」は、転生して夫婦となる運命の男女の話。先に転生した男の前に、まだ転生していない女の鬼が現れて契るという冥婚譚と転生譚が入り組んだ構成の説話である。転生前夜、自分の記憶を持つ最後の夜に、女は男に会いに来たのである。

「崔書生」は、婿として墓室で鬼と暮らすという伝統的な冥婚譚を踏襲する説話である。

塚墓宿泊譚

「閻敬立」は、朱泚の乱を背景とする説話である。建中四年（７８３）、恩賞に対する不満から涇原で軍の反乱が起き（涇原兵変）、反乱軍は長安を占拠し、徳宗は奉天に逃げた。反乱軍は朱泚を担ぎ上げ、翌年、朱泚は皇帝を僭称した。段秀実は敢えて朱泚に仕えて、その命を狙ったが、暗殺に失敗して殺された。閻敬立は、段秀実が徳宗側に密かに送った密使だったのである。

「潯陽李生」は、鬼神の住まうところで一夜を過ごした男が、夜半に

鬼神同士の会話を聞いてしまうという定型に則った話。類話に「楊溥」（「巻三三一　鬼十六」）がある。崔氏の娘の心遣いに、李生は感謝したのである。

変鬼帰還譚

「陸憑」は、鬼となった陸憑の詩を説話の中心に据える詩話である

冥界召喚譚

「羅元則」は、「周式」（「巻三一六　鬼一」）と、時代・場所・人名は異なるが、大筋はほぼ同じである。『太平広記』は「周式」を『法苑珠林』から採録しているが、「周式」はもとは『搜神記』（二十巻本『搜神記』では巻五所収）の説話であり、本話は『搜神記』から翻案された可能性がある。自らの死が記された手紙をそうとは知らずに運びそうになるという話型は、日本の昔話では「水の神の文使い」という型として分類されている。

鬼神遭遇譚

「劉参」の描く騒動が起きた建中二年（781）は、四年にわたる河北藩鎮の乱の勃発した年であり、その時期に厲鬼襲来の噂が広がったのは、社会不安の反映であろう。

「李則」は、遺体を操作する鬼によって引き起こされた怪事と考えられる。死者に化ける野鬼の話は、「僧韜光」（「巻三三〇　鬼十五」）にも見られる。

五　平涼劫盟

―巻三四〇　鬼二十五―（唐徳宗・貞元年間）

巻三四〇　鬼二十五

韓弇　貞元四年、河中節度使侍中の渾瑊が西蕃と会盟した際、西蕃は裏切り、掌書記の韓弇が殺された。韓弇は、親友の櫟陽の尉、李績の夢に顔中血まみれで現れ、無念の思いを詩に詠み、翌日の昼に酒食や紙銭を供えることを頼んだ。次の日、言われたとおりに祭ると、西から来た黒風が酒食や紙銭を全て巻き上げていった。

盧頊　貞元六年、范陽の盧頊は銭塘で暮らしていた。十五、六歳の家婢の小金に、朱十六という四十余りの女の鬼がつきまとうようになり、しばしば小金は朱十六に打たれて意識を失った。

朱十六は前世は東隣りに住む女であったが、毒々しい者であったので蛇に転生させられ、天竺寺の楮樹の穴に住み、人に化けることが出来るようになったのであった。小金は、夢の中で、大獅子に載った老人に、このままでは死を免れないが、鬼神は属している州県でしか活動できないので、杭州を離れれば助かると教えて貰い、ひそかに嘉興に行き、その後は無事であった。

李章武　貞元三年、崔信が華州の別駕となり、長安から会いに行った親友の李章武は、その地で王家の嫁としばらく私通していたが、長安に帰ることになり、関係が途絶えた。

貞元十一年、李章武は久しぶりに王家を訪れ、隣婦より既に王氏の一族はこの地を離れたことと、王家の嫁が二年前に章武を想いながら病死したことを聞き、住む人の無くなった王家の屋敷に泊まった。すると、鬼となった王家の嫁が現れ、その様子は以前と変わらなかった。別れ際

に王家の嫁は、西岳の玉京婦人より授けられた仙界の宝物を李章武にくれた。

「巻三四〇　鬼二十五」は、徳宗の貞元年間を時代背景とする説話三話を収録している。収録話数が少ないのは「盧頊」「李章武」の二篇が長編のためである。多数の説話の蓄積を経て、鬼話の構造は複雑化し、文芸性の高い長編が成立するに至った。「韓弇」は貞元年間に吐蕃によって引き起こされた惨劇「平涼劫盟」に関わる説話である。

冥婚譚

「李章武」は、鬼となっても李章武を思い続ける人妻の心理を細やかに、また李章武との情交を官能的に描き、高い文芸性を有している。人妻の思いが一途でけなげである故に、不倫であり冥婚であるという邪淫性が一層強く読者に意識される、ジレンマの構造が優れた作品である。

変鬼帰還譚

「韓弇」の背景にあるのは、「平涼劫盟」と呼ばれる事件である。貞元三年（787）、唐は吐蕃との紛争を解決するため、渾瑊が会盟使となって平涼川で吐蕃と会盟を行うことになったが、会場に向かった渾瑊らは吐蕃の伏兵に襲われ、多数の文官や兵士が殺され、又は捕虜となった。本話は、この事件の犠牲者の思いを代弁するものである。

凶宅鬧鬼譚

「盧頊」は、小金が盧頊宅を中心とする地域で朱十六に付きまとわれ続けた事件を描いているので凶宅鬧鬼譚に分類した。

まとめ

「鬼二十一」から「鬼二十五」は、背景となる時代が

巻三三六　鬼二十一―粛宗・乾元～上元年間
巻三三七　鬼二十二―粛宗・乾元～代宗・大暦年間
巻三三八　鬼二十三―代宗・大暦年間
巻三三九　鬼二十四―代宗・大暦～徳宗・貞元年間
巻三四〇　鬼二十五―徳宗・貞元年間

となっており、安史の乱の時期から、その終息期、そして小康状態を経て、藩鎮の反乱や異民族の侵攻といった内憂外患が社会を揺るがす中唐初期までを描く。史思明、元載、劉晏、段秀実、渾瑊ら、この時期のキーパーソンの名が所収説話に見られるが、説話内容は、それらの人物が関わった歴史的事件を正面から描いているわけではない。歴史的事件を人間の物語として正面から描くことは史書の役割であり、鬼話の意義は、歴史の表面に現れることなく人間社会に影響を与える冥界の理を浮き彫りにすることにあったからである。

『太平広記』鬼部が意図したのは、大量の鬼話を通して時代を再構成することであり、それによって史書とは異なる時代解釈の視点を獲得しようとしたのである。

注

（1）『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号（２０１５）

（2）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第26号（２０１６）

（3）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第27号（２０１７）

（4）『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』（中華書局　一九六一）に拠った。また各説話の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注 太平廣記 鬼部二』（やまと崑崙企画　二〇〇一）を参考とした。

※本稿は科学研究費基盤研究（C）研究課題「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号：26370432】の研究成果の一部です。

The ghost stories of " Taiping Guangji "　vol.21~vol.25

MITTA Akihiro

[Abstract] "Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)" is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed vol.21~vol.25 of the ghost story parts.The results of the analysis, the ideological features of Tang dynasty ghost stories have been cleared.